

広尾学園中学校高等学校

(現 順心女子学園)

帰国生には最高の環境と条件 (7)

国際担当 小山 和智

2007年4月、新生「広尾学園」がいよいよスタートします。順心女子学園の帰国生に対する受け入れ体制や個別指導の素晴らしさが男子にも開放されるわけで、既に男子の合格者が多く出ています。ますます目が離せない学校です。

● 国際バカロレア機構 (IBO) の候補校に

昨年暮れの朝刊各紙 (12月14日付) に、2007年度から玉川学園と広尾学園に“国際学級”が開設されることが取り上げられました。記事では、都内の私立中学校で最も学費が高いクラスとして紹介されているのですが、「国際バカロレア (IB)」に準拠する教育課程にしては、インターナショナルスクールの学費に比べて半額です。

現地校に通っている皆さんには、「IB」という言葉には馴染みが少ないかもしれませんね。最初は、国連機関職員の子女のために考案された教育プログラム (例えば、ニューヨークの国連インターナショナルスクール=UNIS) ですが、現在では世界124カ国、1,904校が採用するに至っています。

日本で公立学校から公立学校に転校する場合は、転校生が同じ学年に入れば、ほぼ同等・同質の教育が受けられるようになっています。それと同じことを、世界各地にある学校同士でやろうとしているのが「IBプログラム」でもあります。もちろん、その前提に「世界各国が相互に依存する社会にあって、グローバルな諸問題を克服していける人材を育てる」という理想が存在するのですけど。

この「INFOE」誌にも掲載されていますとおり、大阪の千里国際学園 (OIS)、静岡県の加藤学園暁秀高校・中学が既に、IBプログラムを導入していますが、今年4月から広尾学園、玉川学園においても導入するわけです (当分の間は“加盟候補校”として審査を受けながら運営します)。

広尾学園の「インターナショナル・コース」では、まず7年生～10年生の「中等教育課程 (MYP)」を開設し、次年度以降に11・12年生に相当する「ディプロマ課程 (DP)」へと進展させていく予定です。

● 「日本語イマージョン」の発想

「インターナショナル・コース」は元々、広尾学園の周辺に住む外国駐在員家庭の子を対としたものでして、もちろん主要教科を英語で指導します。しかし、音楽や美術、体育などは、ある程度の人数がいないと楽しい授業ができませんから、「特進コース」の生徒との合同授業、つまり「日本語イマージョン授業」となります。

したがって、広尾学園の「特進コース」にいる帰国生にとっても、外国人の生徒との交流の機会が日常的にあるわけです。部活動や学校行事の時だけでなく、音楽や美術、体育などの授業を一緒に受けるのですから、現地校での生活にかなり近い雰囲気となることを期待しています。

また、IBプログラムを教えるネイティブ教員は、特進コースの英語特別授業 (帰国生の取り出し指導) を担当するだけでなく、合同授業のサポートにもつきますので、毎日2～3時間指導をうける機会に恵まれるでしょう。外国人生徒が“普通の生徒”として行動できる空間は、帰国生にとっても居心地よいはずですね。



音楽会：高校クラス合唱